



赤羽別院報 第53号
発行所 真宗大谷派 赤羽別院 親宣寺
〒444-0427
愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14
Tel・FAX (0563)72-2308
Eメール akabane_betuin@katch.ne.jp

講師プロフィール
天野 美津子 (あまのみつこ)
1962 (昭和37)年
愛知県生まれ
岡崎教区第7組 等周寺 坊守
同朋会館 教導
岡崎市人権擁護委員
岡崎学区研修事業部長

ちて原因不明の脊髄炎を患い再び入院。一時期は車椅子でしたから、お葬式に行くと周りの方々から、住職さんどうなさったの、酒が転移したのかしらと、いろんなことを言われまわりました。ご門徒さんには「本当にさめ参りに行けなくてながらリハビリに励む日々。ようやく二本の杖で歩けるようになりまして。そんな四苦八苦をしている最中、星野富弘さんの『いい日いい日』と言う詩に出会いました。この星野富弘さんという方は、不慮の事故で頸椎を損傷されて、手足の自由を失われ、今は車椅子の生活です。その方が書かれた詩を読みながら住職は、うすら涙を浮かべて共感しておりました。『いい日いい日』、つじの花のむこうを、老人が歩いていく。赤ん坊をおぶっている足よりも軽やかだ。右足左足右足左足。あつ片足立った。おっ半ひねり。あんな人が歩く。こと前はほんのあんな見事な技。こともなく毎日やっていたのか。」

別院行事のご案内
除夜の鐘(初鐘) じやのかね(口かね)
12月31日(日) 午後11時30分より
鐘撞きは先着順・どなたでも可
おしるこ・菓子等を用意しています。
修正会 しゅしょうえ
1月1日(月) 午前0時30分
法話 輪番 三浦 真教師
双全講 そうぜんこう
1月15日(月) 午後1時30分
法話 第14組 専興寺 浅野眞理子師

報恩感謝ということ



今年最後と思うべし。私は日々巡り合っており、大事に頂いているかな、いろんなご縁に巡り合っており、その出会いを大事にしてきたかな、「今生最後」と思うべし。明日もその日が過ぎていけばいい。今日もしれず明日かもしれない我が身を生き延びているという、そういう生き方を私自身がしてきたかどうか、この言葉に触れた時に考えさせられました。

仏法は聴聞にきまるとなり

蓮如上人の「仏法は聴聞にきまるとなり」という言葉があります。「聴聞」と言葉で聞くと、仏法聴聞、聞かなあかんね、となりませうけど、「聴聞」という字を書き出すと、「きく」という漢字が二つになります。聴くというは物の音を耳でとらえる、風の首を感じる、また、お話を聞く中で、こういう事を言っているんだな、と「聴く」ということです。

「お番」の晩はゆきのころ、雪はなくても暗のころ、くらい、夜みちをお寺へつけば、とても大きな焔燭ととても大きなお火鉢で明るく、明るい、あたたか大人はしつとりお話を、子どもは騒いじゃやられる、だけれども、明もよって、なにかしなない、いやいられない、更けてお家へ帰っても、なにかうれしい、わらわら、「お番」の晩は夜なかくも、なにか、足跡の音がする。

御同行と集まって話し合いをしながらも、毎年のことだからと、どこか疎かに動いているのではないかと、親鸞聖人の教えを自分の生活の飯の糧くらに思っていないか、それなら私たちが親鸞聖人を宗祖と呼ぶ資格が無いのではないかと話されました。私は厳しい言葉だと思いましたが、

装束作法
しょうぞくさくほう
2月12日(月) 午後1時30分〜3時30分
七条袈裟について
講師 第8組 宿禰寺 織田頭慶師
春季彼岸会 しゅんきびがえ
3月20日(火) 午後1時30分
3月21日(水) 午後1時30分
法話 講師 未定

念仏の上に生活が学ばれる
真宗門徒としての日々の生活とは何か。今は亡き、和田綱先生という方がいらっしやいました。和田綱先生が生前、この様な事を言われました。「生活の中で念仏するのではなく、念仏の上に生活が営まれる」と生活の中で念仏する事は大事なこと、分らないけれど、そんな事も自分の得手勝手、都合のいい念仏生活になっていくのです。お寺にいながらお内仏の前、阿弥陀さんの前で合掌をして毎日精進した心

感謝する心
昨年、うちの住職が前立腺がんにて手術をしました。昨年6月に手術を分かってから、手術をするまでの3ヵ月間は検査入院を繰り返しました。その内容が、どのようなものが丁寧な検査をして頂きましたか。お陰様で手術が出来ました。しかし、その後、免疫力が落

花まつり
はなまつり
3月31日(土) 午後1時〜4時
一色町仏教会が主催する、スタンラリー
本年のゴールは赤羽別院です。
農朝法話
じんじょうほうわ(午前七時)
1月13日(土) 第14組 光輪寺 高木 真師
1月28日(日) 同 報恩寺 石川 勇吉師
2月13日(火) 第8組 安樂寺 伊奈 康祐師
2月28日(水) 同 福正寺 本多 友明師
3月13日(火) 第9組 妙隆寺 大深 康照師
3月28日(水) 同 了淨寺 大深 專淨師

「お番」の晩はゆきのころ、雪はなくても暗のころ、くらい、夜みちをお寺へつけば、とても大きな焔燭ととても大きなお火鉢で明るく、明るい、あたたか大人はしつとりお話を、子どもは騒いじゃやられる、だけれども、明もよって、なにかしなない、いやいられない、更けてお家へ帰っても、なにかうれしい、わらわら、「お番」の晩は夜なかくも、なにか、足跡の音がする。

「お番」というのはその地方で「報恩講」という意味です。年に一回の報恩講が厳かで丁寧にしてにぎやかに勤められていた、そういう様子がこの金子みすゞさんの詩から伺う事が出来るわけですね。昔、大人は朝から晩まで報恩講の時にはお寺に通い、仏様の仏法の教えに耳を傾け聴聞し、又その大人と一緒に子どもはお寺について来ていました。子ども達はお寺さんの話を聞いても分りません。でも、その場の雰囲気といえますか、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんに連れて来られた子ども達も、楽しんで集まって、お寺さん何言ってるか全然分からな、分らないけれど、そんな事も自分の得手勝手、都合のいい念仏生活になっていくのです。お寺にいながらお内仏の前、阿弥陀さんの前で合掌をして毎日精進した心

「お番」というのはその地方で「報恩講」という意味です。年に一回の報恩講が厳かで丁寧にしてにぎやかに勤められていた、そういう様子がこの金子みすゞさんの詩から伺う事が出来るわけですね。昔、大人は朝から晩まで報恩講の時にはお寺に通い、仏様の仏法の教えに耳を傾け聴聞し、又その大人と一緒に子どもはお寺について来ていました。子ども達はお寺さんの話を聞いても分りません。でも、その場の雰囲気といえますか、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんに連れて来られた子ども達も、楽しんで集まって、お寺さん何言ってるか全然分からな、分らないけれど、そんな事も自分の得手勝手、都合のいい念仏生活になっていくのです。お寺にいながらお内仏の前、阿弥陀さんの前で合掌をして毎日精進した心

「お番」というのはその地方で「報恩講」という意味です。年に一回の報恩講が厳かで丁寧にしてにぎやかに勤められていた、そういう様子がこの金子みすゞさんの詩から伺う事が出来るわけですね。昔、大人は朝から晩まで報恩講の時にはお寺に通い、仏様の仏法の教えに耳を傾け聴聞し、又その大人と一緒に子どもはお寺について来ていました。子ども達はお寺さんの話を聞いても分りません。でも、その場の雰囲気といえますか、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんに連れて来られた子ども達も、楽しんで集まって、お寺さん何言ってるか全然分からな、分らないけれど、そんな事も自分の得手勝手、都合のいい念仏生活になっていくのです。お寺にいながらお内仏の前、阿弥陀さんの前で合掌をして毎日精進した心

謹賀新年

年頭挨拶



輪番 三浦 真教

仏光照護のもと皆様方には新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は赤羽別院・教化センターの法要・諸行事にご理解・ご協力を戴き、有り難うございます。本年もご指導・ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。9月11日付けで図らずもこの二年間の輪番重任の辞令を拝命し、身を引き締まる思いです。十年目を迎えた赤羽地域教化センターは第四期目に入り、新しいスタッフが加わって、限られた条件の中で、工夫を重ねながら、事業の見直しにも取り組んでおります。教化センター広報部ではホームページの編集作業が進行中であり、赤羽御坊新聞の第1号から第52号までいつでも読める状態になる予定です。また、赤羽ブロック世話方会では昨年11月から9回の清掃奉仕が始まりました。教化活動の体制の組織作りと、時代に合った教化活動の展開を図り、教化センターの使命を全うできるよう皆様方と一緒に歩んでまいりたいです。

教化センター主幹 浅野眞理子師・新任 歩みの検証と充実を

主幹 浅野 眞理子

この度、第4期赤羽地域教化センターの主幹を仰せつかりました。長い間教化センターのスタッフとして関わらせて戴き、お礼申すところでありますが、引き続きこの様な重責を担う立場に置かれ、戸惑っているところでもあります。さて、地域教化センターは発足から10年の歳月が過ぎました。これまでの歩みを検証し、更なる充実を目指し、再出発をしていかねばなりません。力不足ではありますが、心新たに、別院に課せられた有縁の方々の思いを受け止め、職務に取り組んでまいります。どうぞ、ご指導の程、よろしくお願ひ申し上げます。

お彼岸は古来より「暑さ寒さも彼岸まで」と言われるように、日本人にとっては季節の変わり目を肌で感じながら、お寺やお墓にお参りをして、仏祖を偲ぶ御仏事であると同時に、仏法を聴聞して、自分の生活を振り返り見つめ直す期間でもある。赤羽別院でも、秋風が心地よい去る9月22日・23日の両日、秋季彼岸会が厳修された。初日の法座では、第13組・長壽寺若院の和田大和師、二日目は第18組・福万寺衆徒の北野隆之師がお話された。初日の和田師は「三解依文」の意義について丁寧に解説された後、仏法を学ぶ上で基本の教えとなる三法印の「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜

和田師・北野師の法話

秋季彼岸会を厳修



真剣に語る和田師

「無常」は、一般にはマイナスのイメージを持たれる言葉であるが、我々が如何に受け止め、受け入れていくかが大事であると話された。師の初々しい緊張感と真摯に教えと向き合う姿勢が伝わり、今後の研鑽を期待させる法座であった。



お御堂前にて

積極的な意見交換 赤穂組来院

去る10月10日、山陽教区赤穂組より8名が来院されました。一行は三浦輪番より、赤羽別院の沿革・山門に関するエピソード・教化センターの活動や課題などについてお話を聞きながら、各々の地域のなかで、どのように歩みを進めていくべきなのか、積極的な意見交換をしていかれました。

御坊さんの報恩講

親鸞聖人のみ教えを尋ねて

赤羽別院報恩講厳修

去る10月14日から16日の三日間、赤羽別院では報恩講が厳修されました。二日目となる15日は、生憎と小雨が降り足元が悪く、冷える日となりました。喚鐘が打ち鳴らされ、法要の開始を告げる頃、堂内には法要をお待ちする人たちの姿が増え、小雨や寒さなど感じさせないほどの熱気に溢れていました。内陣の着座とともに、一体となったかのように、ご本尊に向かい合ふと「南無阿彌陀仏」のお念仏の音が聞こえてきました。響く音に次いで輪番の声で始まった正信偈のお勤めは僧侶も一般の参詣の方も関係なく、堂内の人たちはみな一つとなって、御唱和されました。

動行に引き続いて第15組・明水寺住職の鈴木聡師よりご法話がありました。師は、聖徳太子の十七条憲法にもある篤く三宝を敬えとされた帰依三宝を中心としたお話を展開されました。日頃の私達は、亡くなった方を通して得られた御縁を仏縁として受け取れず、亡くなった方を成仏したからと言ってまるで都合の良い神様の様に扱っていないかと問いかけられました。そうやって神社の神様と同じように扱うのは自分の罪福心によるもの。日々の生活において、ひたすら願うのは、悪い事は避けたい。良い事は際限無くもって欲しい。そうしたい心が私自身の中には常にあり、それは自分の思いで物事の善し悪しを

しを考えているからだと思われました。その善し悪しを決めているのは私達自身であり、本當の善し悪しを問うものが法なのです。自分にとって都合の悪い物事こそが本當に大切なものではないのか? 私達は仏法のもとに集う仲間として御縁を頂いています。阿彌陀様の前では分け隔てなく救いの対象であるとお伝えしていただきました。師のお話を聞きながら、親鸞聖人のみ教えを改めて確かめさせていただく報恩講となりました。

報恩講をお迎え

清掃奉仕・おみがき・お華束作り

肌寒い朝を迎えた10月9日午前7時、10月15日から三日間厳修される別院報恩講をお迎えするにあたって、赤羽地域世話方会と教化センタースタッフ合同の清掃奉仕が行われた。当日の境内は普段見慣れている静かな朝とは違い、各組から集まった40名を超える世話方会と教化センタースタッフの声で活気に溢れていた。参加者は、三浦輪番からの挨拶を聞いたあと、それぞれ持ち場を自分達で決めて、落ち葉をかき集める人・草を抜く人・竹ぼうきを手にはく人、それぞれ出来る事を自発的に考え動かれていた。更に、お御堂内においては、別院世話方による、仏具のおみがきも同時に進行された。一緒に清掃作業をしながら時間を過ごす、自然と交流

も生まれ、参加者の話し声や笑い声が至る所から聞こえてきた。また、同月12日には、第13組の門徒会員によって報恩講にお飾りするお華束作りが行われ、別院列座と共に報恩講をお迎えするために汗を流した。掃除や準備という、雑用で楽しいイメージはわきにくいが、人が集まれば語り合う場となりうる事を教えてもらった貴重な時間となった。



おみがき

お勤め練習 助音講 赤羽別院報恩講に先立ち9月28日と30日の2回、ご門徒を対象としたお勤めの練習が行われた。昨年までは1回1時間であったが、今年はご門徒さんの1時間では短いという熱い申し出により、1回2時間に延長して行われた。当日は正信偈の読み方や盤の打ち方など、質問が次々に出され有意義な場となっていた。勤行本を手に



勤行本を手に

漫オコトえしりりり

親鸞聖人讃仰・御堂寄席

毎年別院の法要に合わせ開催されている、恒例の御堂コンサート。今回はいつもとは少し趣向を変えて「親鸞聖人讃仰・御堂寄席」と称して開催された。仏教の目的は抜苦与楽と云われているという事から「業」を「業しりり」と考え、ひとときでも笑い楽しんでもらうことを考えての企画である。出演はマスコミにも多く取り上げられ、名古屋を中心活躍する人気のお坊さん漫オコト「えしりり」。



学生時代から友人だったと言ふ二人は、共にお坊さんということもあり、仏教用語を交えながら、最後には、以前に御堂コンサートで演奏した、お坊さんバンドのメンバードもある、えしりりさんのギターと歌で、東北地震支援ソング「手繋ぎマーチ」をみんなで合唱し幕を閉じた。

第14組 一行80名 本山報恩講参拝

境内の所々に黄金色の敷物を敷いたような東本願寺に、11月27日、第14組北部寺院11ヶ寺80名が参拝しました。

観光バス2台が早朝の碧南市内の各集合場所を回り、やがて昼過ぎに本山に到着しました。御影堂からはお勤めの声が明々と響いていました。一行は御影堂に向かって両手を合わせた後、勸行本を手に一緒にお勤めをしました。



源兵衛親子の像

『弥陀智願の回向の信衆まことにこの日は振取不捨の利益ゆえ等正覚にいたるなり』法要の後、同朋新聞に掲載された、約四百年前の撞鐘を拝見することもできました。この撞鐘は徳川家康公から東本願寺へ土地を寄進された時に造られたものと書かれており、歴史の重みにも触れる

ことができました。翌28日に訪れた光徳寺では、源兵衛親子の像や首と伝わるものを拝ませてもらった。命に替えても阿弥陀様をお守りする、信心の純粋さ・力強さを教えられました。他に、堅田の本福寺などの由緒ある寺々も参拝し、紅葉も楽しませてもらった。沢山の御法をいただく報恩講参拝となりました。

第10組 団体参拝 蓮如上人ゆかりの地へ



本福寺住職による説明

去る11月24日、第10組47名は真宗本願(東本願寺)報恩講に団体参拝した。一行は阿弥陀堂にお参りした後、御影堂で法話を聞き、日中法要にお参りした。早朝に到着したため他の参詣者は少なく、参加者は両堂をじっくり見渡しながら、寂かな堂内の雰囲気を感じていった。

翌25日は蓮如上人ゆかりの堅田本福寺(滋賀県大津市)にお参りし、住職から寺院の歴史や寺宝についてお話をいただいた。聞くところによると、空町時代、本福寺の三代住職・法住は、蓮如上人との出会いによってお念仏の教えに深く帰依し、真宗教団が延暦寺から圧迫を受けるため、真宗の教えを守るため一人で延暦寺に乗り込み、その正当性を訴えた。延暦寺によって大谷の本願寺が破壊された際には蓮如上人を堅田に迎えて守る等、蓮如の右腕といわれるほど深い信頼関係があったとされる。堅田の地を訪ね、あらためてお念仏の教えが先達によって私たちに伝わってきたことへの尊さを感じた。その後は同県にある本願寺派・赤野井別院、大谷派・赤野井別院にお参りした。赤野井も蓮如上人がたびたび訪れ、上人に関わる昔話が残っている。珍しいことに別院は道を挟んで隣接しており、真宗の信仰が篤い地であることが実感することができた。

ころによると、空町時代、本福寺の三代住職・法住は、蓮如上人との出会いによってお念仏の教えに深く帰依し、真宗教団が延暦寺から圧迫を受けるため、真宗の教えを守るため一人で延暦寺に乗り込み、その正当性を訴えた。延暦寺によって大谷の本願寺が破壊された際には蓮如上人を堅田に迎えて守る等、蓮如の右腕といわれるほど深い信頼関係があったとされる。堅田の地を訪ね、あらためてお念仏の教えが先達によって私たちに伝わってきたことへの尊さを感じた。その後は同県にある本願寺派・赤野井別院、大谷派・赤野井別院にお参りした。赤野井も蓮如上人がたびたび訪れ、上人に関わる昔話が残っている。珍しいことに別院は道を挟んで隣接しており、真宗の信仰が篤い地であることが実感することができた。

お念仏の心が満ちる 正念寺報恩講厳修

12月1日から3日、天候にも恵まれ多くの参詣者が集う正念寺報恩講が動まりました。住職の調声から始まった正信偈に御門徒さんも唱和をされ、本堂内は正信偈とお念仏の心が満ちました。引き続き行われたご法話は伊奈祐祐師を講師に迎えました。



お勤めの声が響く

三日目の小谷香示師の法話では、ご自身の闘病生活に触れる内容で、中でも三浦依文の「一人身うけがたしいますでに愛く」という言葉を用いて話をされた。病を患い、それまで当たり前と思っていた我が身が不確であることを知らされた話された。また、お念仏とは何かという言葉を数冊の言葉を引用して、丁寧かつ力強く

語られました。不測の事態がおきて当たり前、自慢の種を失っていくことを知らされた今回の闘病生活のなかでも安心してお念仏の道に生きる事が出来るのだと語られました。改めて、浄土門に生きる事を法上人・親鸞聖人をはじめとした祖師方より賜った私達なのだ、確かめさせていただいた報恩講となりました。

昨日10月28日、鎌谷町の蓮光寺にて、吉良町萩原の浄土真宗本願寺派(西本願寺)教連寺前住職・小野正信師を講師に招き門徒研修会が行われた。「忠臣蔵」や「水戸黄門」等を称賛する気持ちに象徴される現代人の病「ハッピーエンド候群」―自覚のないまま迷いの中に生活―という講題の話に始まり、親鸞聖人の教行信証(行巻)より正信偈・偈前の文「大聖の真言に帰し、大祖の解釈に聞いて、仏恩の深遠なるを信じて、正信念仏偈を作りて日く」という解釈を大無量寿経にさかのぼり丁寧に説かれた。更に、インドの言葉を音写したとされるお念仏「南無阿弥陀仏」を漢訳して「帰命無量

寿如来」とされたことを取り上げ「正信偈」が生れた経緯を詳細に語られた。小野師は現在、本願寺派であるが、出身は大谷派ということもあり両派の相違を熟知、その違いを気さくにお話され、参加者たちは時間を忘れて聞き入っていた。

昨日10月28日、鎌谷町の蓮光寺にて、吉良町萩原の浄土真宗本願寺派(西本願寺)教連寺前住職・小野正信師を講師に招き門徒研修会が行われた。「忠臣蔵」や「水戸黄門」等を称賛する気持ちに象徴される現代人の病「ハッピーエンド候群」―自覚のないまま迷いの中に生活―という講題の話に始まり、親鸞聖人の教行信証(行巻)より正信偈・偈前の文「大聖の真言に帰し、大祖の解釈に聞いて、仏恩の深遠なるを信じて、正信念仏偈を作りて日く」という解釈を大無量寿経にさかのぼり丁寧に説かれた。更に、インドの言葉を音写したとされるお念仏「南無阿弥陀仏」を漢訳して「帰命無量

去る9月7日、第9組では一日研修会が実施され、門徒21名僧侶9名、計30名が参加した。早朝よりバスに乗り込んだ一行は、まず杉原千畝のゆかりの地である、岐阜県八百津町を訪れた。杉原千畝は外交官であり、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって迫害を受けていた難民たちに大量のビザを、外務省の命令に反して発給し、約六千人の難民を救ったことで知られている。八百津町には、杉原千畝の記念館があり、一行は記念館スタッフから杉原氏の生涯を聞くと共に、戦争の凄惨さを改めて確かめた。午後からは、名古屋市中区にある、覚音寺を参拝した。覚音寺は清沢満之が得度し、学校へ通う際に寝泊まりした寺院といわれ、境内には「我が信念」と刻まれた石碑が建てられていた。

去る9月7日、第9組では一日研修会が実施され、門徒21名僧侶9名、計30名が参加した。早朝よりバスに乗り込んだ一行は、まず杉原千畝のゆかりの地である、岐阜県八百津町を訪れた。杉原千畝は外交官であり、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって迫害を受けていた難民たちに大量のビザを、外務省の命令に反して発給し、約六千人の難民を救ったことで知られている。八百津町には、杉原千畝の記念館があり、一行は記念館スタッフから杉原氏の生涯を聞くと共に、戦争の凄惨さを改めて確かめた。午後からは、名古屋市中区にある、覚音寺を参拝した。覚音寺は清沢満之が得度し、学校へ通う際に寝泊まりした寺院といわれ、境内には「我が信念」と刻まれた石碑が建てられていた。

多くの方の手によって行われる大切な仏事のなかで、住職が提唱する手間というご馳走を頂いただけ、人間らしい時間を少しだけ垣間見ることが出来た気がした。

多くの方の手によって行われる大切な仏事のなかで、住職が提唱する手間というご馳走を頂いただけ、人間らしい時間を少しだけ垣間見ることが出来た気がした。

MOTOR STATION KAWAKAMI (株)川上モータース TEL 0563-32-0313

TATAMI 畳・襖・障子の無料見積りは 0120-57-2812

一行は覚音寺住職より、清沢満之と覚音寺についてお話を聞いた後、この覚音寺より徒歩15分程の所に筒井小学校という、清沢満之が教鞭をとっていたという小学校に向かった。小学校にも石碑や、清沢満之についての解説が置かれており、児童達はそれを通して登下校していると、職員の方より説明を受けた。杉原千畝・清沢満之の歩みを確認、各々が訪問先で積極的に質問する姿があり、充実した研修となった。

一行は覚音寺住職より、清沢満之と覚音寺についてお話を聞いた後、この覚音寺より徒歩15分程の所に筒井小学校という、清沢満之が教鞭をとっていたという小学校に向かった。小学校にも石碑や、清沢満之についての解説が置かれており、児童達はそれを通して登下校していると、職員の方より説明を受けた。杉原千畝・清沢満之の歩みを確認、各々が訪問先で積極的に質問する姿があり、充実した研修となった。

MOTOR STATION KAWAKAMI (株)川上モータース TEL 0563-32-0313

TATAMI 畳・襖・障子の無料見積りは 0120-57-2812

覚音寺本堂前

広告募集 44-0427 愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14 Tel・FAX (0563)72-2308 akabane_betuin@katch.ne.jp

人間模様 19

大根、里芋、きゅうり、スイカ、冬瓜、ブロッコリー、ウコン等、ご自身の畑で様々な野菜を日々育てながら、熱心に仏法職人に励まれている第9組・福泉寺門徒 羽山久代氏を訪ね、お寺との関わりや、時代の流れのなかで感じること等、氏のお心をお聞かせいただいた。

「初めてお寺に足を運ばれたのはいつですか？」
 もう50年以上前になりましたが、義父が亡くなった際に、はつきりとした所屬寺がないなか、私が福泉寺さんにお世話になろうと言ったことがきっかけで、それからお寺と関わりをもつようになったようになりました。



羽山久代さん

平成2年からは義母に代わって、福泉寺の同朋婦人部に参加するようにになり、80歳になるまで役員も務めてきていただきました。
 「同朋婦人部での活動について聞かせて下さい。」
 年2回のおみやげや、報恩講のお祈りの準備を中心にお手伝いをさせて頂いて

「永くお寺に関わっているなかで感じることは？」
 同朋婦人部は、年長者だけでなく、次の世代の方が積極的に参加して下さるので、世代交代が続いていることは嬉しく思います。
 また、これまで「婦人会」として、女性中心の法座が毎月5日に福泉寺さんで動まっていたのですが、去年からは「五日講」と名前を改めて、どなたでもお参りできる法座が開かれています。
 他には、昨年まで、お寺から距離のある地区でも公民館で地域の報恩講(お慰す)を、お事情により、今年からは動めることができました。一軒一軒のお講勤めは動まっています。お寺離れを感じますが、今後とも続いていきたいと思っております。どのようになっていますか？」



大切に育てている野菜

また福泉寺さんの報恩講のお斎に使っていただければと思います。野菜を育てています。ひとりでは食べきれませんからね。
 3年前に夫が亡くなり、寂しい思いもありますが、プールの通ったり、食事会に出かけたり、外に出て人と関わることは続けていきたいです。
 最近では夏の夏期講習で祖父江佳乃さんのお話がとても印象的でした。なにより、御聴聞を続けていきな

蓮如三河巡化550年 應仁寺と三河の蓮如展

1月23日より 3月4日

蓮如上人が三河に巡化されて五〇〇年を迎えることを記念し、「應仁寺と三河の蓮如上人展」が、1月23日(火)から3月4日(日)まで、碧南市大浜の藤井達吉現代美術館にて開催されます。
 西三河地方は、應仁二年蓮如上人が歸藏の頃に三河の地を訪れたことにより、本願寺教団が大きくなり、発展し、蓮如上人ゆかりの寺院も多くあります。



本展示会では、碧南市西端の應仁寺など、西三河各地に伝来する
 蓮如上人の御遺品や、蓮如上人ゆかりの寺院も多々あります。
 詳細はチラシやホームページにて。奮ってご観覧ください。

真宗講座 開催のお知らせ

赤羽別院では、次により真宗講座を開催します。
 是非、御聴聞ください。
 テーマ 「蓮如上人三河御巡化550年」
 第1回 1月26日(金) 講師 同朋大学講師 青木 馨 師
 第2回 3月26日(月) 講師 同朋大学教授 安藤 弥 師
 講座「蓮如上人御巡化の世界」

時間 各日共 午後2時〜4時
 受講料 1回 500円
 その都度受付にお支払ください。

帰敬式を 受式しませんか!

帰敬式とは「釋」の字を冠した二字の法名を賜り、仏様の教えを聞き、仏法を依りどころとして生きる者となることを明らかにする。人生の方向転換の儀式です。
 この帰敬式は「おかみそり」とも呼ばれ、「おかみそり」でおかみそり(剃刀)が三度、頭にあてられます。
 別院では、本年も本山鍵役の剃刀により帰敬式を執行します。
 あなたも受式しませんか。
 期日 平成30年4月11日(水)
 場所 赤羽別院お御堂
 眞加金 二万円
 詳細は、赤羽別院またはお手次寺院にお問合わせ下さい。

聞法の間を整える 赤羽ブロッコ世話方会清掃奉仕

昨年9月の役員会において、現在一人の男性世話方によって、別院境内の手入れをしているが、仕事量が多く重労働でもあると意見が出ました。
 そこで話し合いの結果、4月からは全員参加の、10月の報恩講前回は全員声掛けの年間八回二ヶ組からそれぞれ三名お願いし、六名程で月一回清掃奉仕を実施することになりました。



溝のなかの落葉と泥を掃除

御坊新聞電子化



現在広報部にて赤羽地域教化センターホームページのデジタル作業が進行しています。
 各部主催の行事の予告・報告等を、より広く通知も読むことができるペーシを作成中です。
 第一号は平成8年10月の発行とされており、先達の教化伝道と御坊新聞の歴史が深く感じられます。

第16回御坊俳壇。川柳

俳句(順不同) 運者 三浦 貞葉氏他
 大北風 大橋門を 吹き抜けり
 野路の秋 地蔵の慈恵に 照らされて
 父母の 背流すこと 墓洗う
 石割れ 集る女の 大笑い
 独り居の 狭庭なれども 小鳥来る
 秋葉の 最期寺院の 土になる
 ル暮れの 寺先に凍り 石路の花
 夕べ手に 御坊新聞 読む秋夜
 山門に 集う門徒に 銀杏映ゆ
 衣被 寝たきりままの 母の味
 川柳(順不同)
 冷たしやガチャガチャポンプの 濾過袋 大溪 美恵
 白地図を 渡されこの世に 生まれ来る 齊藤 浩美
 金髪のお膝に抱っここの わが総理 小林 千里
 お知らせ 定例の第16回御坊俳壇。川柳の締切は 2月5日(月)です。奮ってご応募下さい。

お寺の掲示板

世間の眼をんか 捨てちゃえ
 捨てるな 捨てるな
 第十三組 教養寺

ご懇志披露

一、お仏供米
 第14組 東正寺門徒 山中一重 様
 貴重なご懇志をありがとうございます。

編集室

本号は、真宗門徒にとって一年で一番大切な記事であります。「報恩講さん」の各地のお寺や皆さんのご自宅のお内仏での報恩講は、11月28日の親鸞聖人ご命日の前後に「お取り越し」や「お引き上げ」(ご引上)、「お惣仏」なども呼ばれお勤めします。
 報恩講は、掃除やお磨き、仏華やお華束の準備、お斎作りに至るまで、すべて皆さんと一緒に行なっていきます。関わる方々の一人ひとりが報恩講のお荘嚴の一部なのでしょう。お飾りする道具だけがお荘嚴ではなく、場を作ってください。お念仏の教えを一緒に聞かれる方、そして教えを聞かせていただくこの私に、初めてお荘嚴が整うのです。形作られたものは、誰のためでもなく私への「教えを聞けよ聞けよの催促」なのだといただけです。
 新年を迎え、またひとつ教えを聞かせていただく一年をたまりました。